

出雲市歴史博物館

～上塩治横穴墓第17支群～



1997年3月

出雲市教育委員会

TOPICS

原始と古代の出雲平野

出雲平野の成り立ちと主要遺跡の分布

上塩治横穴墓群とは

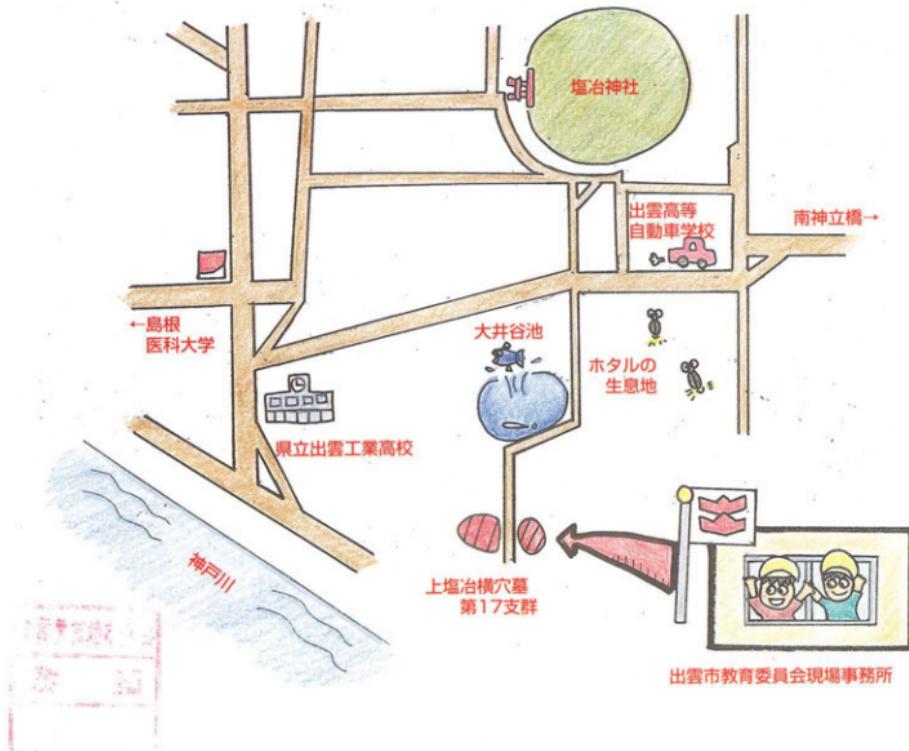
上塩治横穴墓群の概要を紹介

上塩治横穴墓第17支群

平成8年度発掘調査の成果を紹介

古墳時代後期の出雲

古墳時代後期の出雲平野の様子と東部出雲との関係



出雲市教育委員会現場事務所

はじめに

斐伊川の水を、放水路を開削し神戸川へ流す壮大な計画である、斐伊川放水路事業が平成6年に本格的にスタートしました。事業予定地内には多くの貴重な埋蔵文化財があることから、事業に伴いこれら文化財の調査が行われています。平成3年度から島根県教育委員会によって調査が進められてきましたが、事業の本格化に伴い平成8年度から出雲市教育委員会でもグリーンステップ事業予定地などの調査に加わることになりました。

今年度は、上塩治横穴墓群第17支群を中心に調査を進めました。横穴墓は、岩に直接掘られたお墓で、今から1400年前に造られたものです。上塩治横穴墓群は、これまでの調査だけで横穴墓の数は170基を超える全国的に見ても大規模な群集墳です。これまでの調査で金糸や金銅装大刀など貴重な遺物が数多く出土しています。

横穴墓は出雲の古墳時代の終わりを特徴づける遺跡で、近年では各地域で調査例が増えており、新たな視点で調査も行われています。

この冊子では、上塩治横穴墓第17支群を中心に、上塩治横穴墓群とその時代についてご紹介します。何故この丘陵にこれほど多くの横穴墓（古墳）が造られたのかみなさんも考えて見てください。



原始と古代の出雲平野

上塙治横穴墓群のある出雲平野には多くの遺跡が点在しています。これらの遺跡はどのような地理環境のもとで営まれたのでしょうか。

出雲平野の歴史を考える上で切り離せないものは斐伊川と神戸川です。現在、神戸川は西側の日本海へ、斐伊川は東へ流れ宍道湖へとそいでいます。しかし、このような川の流れが形成されたのはごく最近のことです。古代においては出雲國風土記に記載されているように出雲平野の西側には神門水海（神西湖の位置にあったと考えられており、現在よりもかなり大きかった）がありこれに斐伊川・神戸川ともがそいでいました。特に斐伊川は何条にも分かれおり、神戸川とともに洪水を巻き起こすことも多々あったようです。これらの川の氾濫が、出雲平野を形成していました。

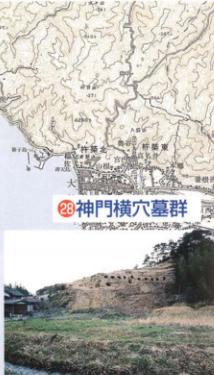
出雲平野に大きな集落が出現していくのは、弥生時代中期になってからのことです。神戸川の流れによって造られた自然堤防の上に古志本郷遺跡や天神遺跡、正蓮寺周辺遺跡といった大集落が営まれるようになります。天神遺跡、正蓮寺周辺遺跡には、集落と外との区画と同時に防御的な意味合いを持つ溝（環濠）が発見されており、この時期には出雲平野にも争いが生じていたことを窺わせます。そして、弥生時代後期には四隅突出型埴丘墓といいう山陰地方に多く分布する特殊な形態の墓が含まれる西谷墳墓群も営まれました。この中でも西谷3号墓では特殊器台という岡山県独特の土器が出土しており、吉備と密接な関係があったと考えられています。

古墳時代にはいると若干は残るもの弥生時代のような大集落はみられなくなります。古墳時代前期においては北光寺古墳、山地古墳といった有力首長墓が築造されますが、出雲東部と比較すると精彩を欠きます。しかし、古墳時代後期になると出雲平野に突如として出雲東部に勝るとも劣らない立派な古墳が築かれ始めます。特に大念寺古墳・上塙治築山古墳・地藏山古墳は出雲平野に君臨した一大首長の系列と考えられています。この後、大きな古墳は徐々に造られなくなり、出雲平野には神戸川を挟んで東側に上塙治横穴墓群、西側に神門横穴墓群の2大横穴墓群をはじめとして多くの横穴墓群が形成されるようになっていくのです。

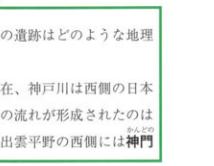
- | | | | |
|-----------|-------------|-----------|-------------|
| 1. 矢野遺跡 | 6. 古志本郷遺跡 | 17. 半分古墳 | 23. 北光寺古墳 |
| 2. 小山遺跡 | 11. 美談神社2号墳 | 18. 宝塚古墳 | 24. 山地古墳 |
| 3. 白枝荒神古墳 | 12. 大寺古墳 | 20. 放レ山古墳 | 25. 出西小古墳 |
| 4. 天神遺跡 | 13. 塚山古墳 | 21. 鴉山古墳群 | 26. 神庭岩船古墳 |
| 5. 高西遺跡 | 16. 地藏山古墳 | 22. 小坂古墳 | 29. 地藏山横穴墓群 |



⑦ 正蓮寺周辺遺跡



② 神門横穴墓群



⑯ 上塙治築山古墳



⑯ 妙蓮寺山古墳



⑮ 大念寺古墳



⑯ 上塙治横穴墓群



⑮ 上島古墳



⑨ 西谷墳墓群



⑮ 荒神谷遺跡



上塩治横穴墓群とは

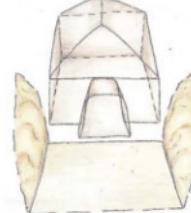


上塩治横穴墓群（第22支群）

上塩治横穴墓群は、37支群170基以上の横穴墓群からなる全国でも有数の大横穴墓群です。穴の天井が家形で、妻入りのものが多く見られるのもこの横穴墓群の特徴と言えるでしょう。造営された時期は、古墳時代終末期にあたる7世紀前半頃を中心とした時期だと考えられます。

その発見は1956年に遡り、門脇俊彦・池田満雄両氏によって8支群21基の横穴墓が「大井谷横穴群」として紹介されました。その後さらに多くの横穴墓が確認されるに伴い、その分布が大井谷に収まらないものであることが明らかになり、1980年に現在の「上塩治横穴群」の名称が初めて使用されることとなりました。

近年の発掘調査によって、上塩治横穴墓群は横穴墓の確認数も増え、その全容も徐々に明らかになります。中でも、横穴墓の中から金糸（21支群10号穴、22支群9号穴）や金製の環（22支群9号穴）等の豪華で珍しい副葬品が出土したことは注目されます。



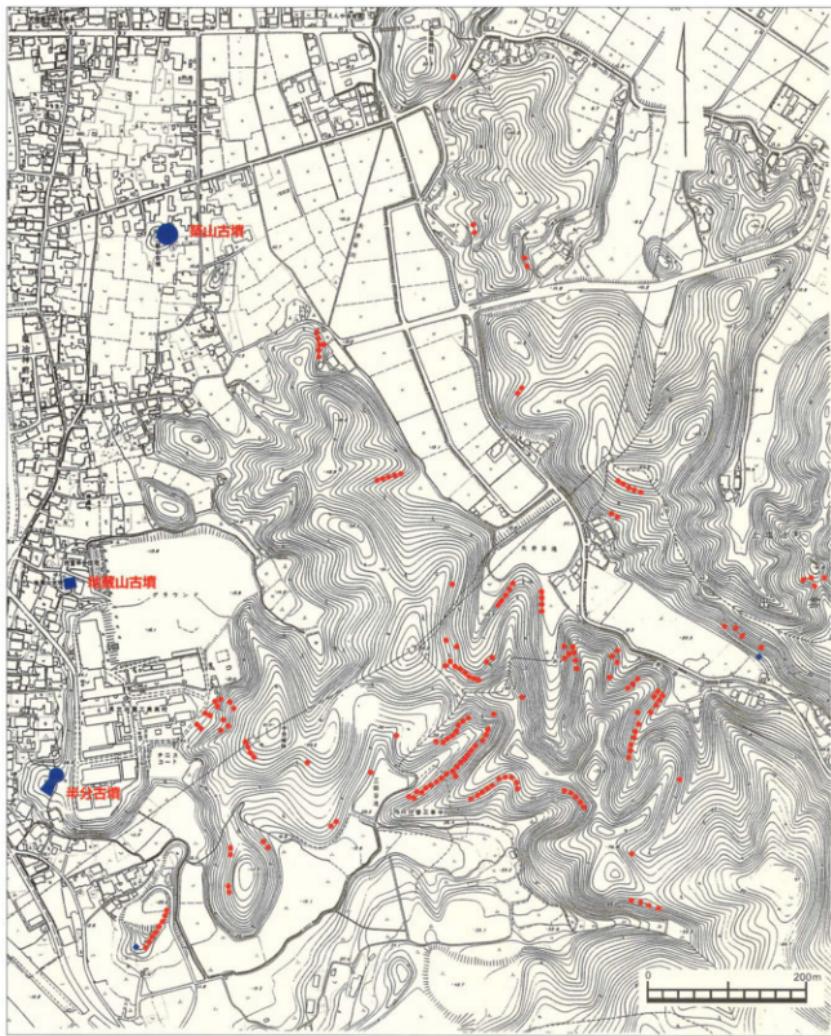
横穴墓様式図



横穴墓近景（第20支群3号穴）



第21支群10号穴出土金糸



上塩冶横穴墓群分布図 ($S = 1/6000$)

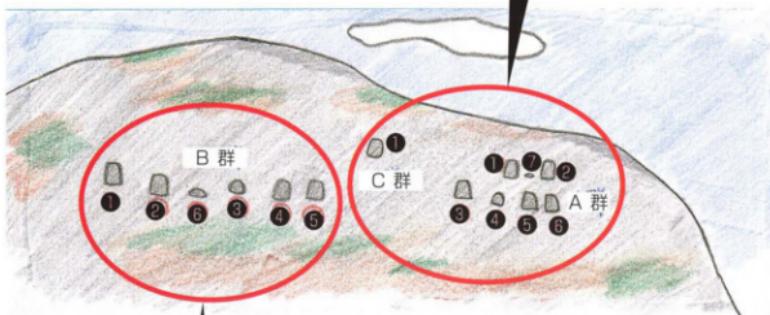
上塩治横穴墓第17支群

上塩治横穴墓群は37支群170穴を超える横穴墓から構成されています。この中の第17支群を発掘調査しました。調査前は、すでに開口した状態で10穴の横穴墓と2穴の造りかけ横穴墓がありましたが、調査が進むと横穴墓が新たに2穴あることがわかりました。この支群ではさらに3つの横穴墓のまとまりがあります。

A群・C群

A群は丘陵の東側に2段にわたって上段に3穴、下段に4穴、合計7穴が造られています。このうちの4号穴は造りかけ横穴墓です。

C群はA群とB群の間に造られています。1穴しかありませんが、17支群の横穴墓の中で最も高いところに造られています。



B群

B群はA群・C群の西側に位置します。造りかけを2穴含む（3号穴・6号穴）合計6穴の横穴墓がほぼ同じ高さに1列で並んでいます。

17支群の横穴墓のほとんどが妻入りの家形をしているのに対して、B群5号穴だけは平入りの家形を呈しています。



閉塞石を持つ横穴墓 (B群1号穴)

この横穴墓には、遺体埋葬後に羨門の部分を閉じるための閉塞石が残っていました。右側の石はきれいに加工された切石、左側の石は大きな栗石です。この他にも羨道部分には2つの栗石が置かれていました。これはこの横穴墓が盗掘を受けたときに散乱させられたものでしょう。



この横穴墓の前庭外には多くの須恵器片が散乱していました。復元してみると完全な形にはなりませんが、大甕3個体分の破片であることがわかりました。これらはかなり下にまで散乱しており、前庭の外で壊れた後に流れていったものと考えられます。

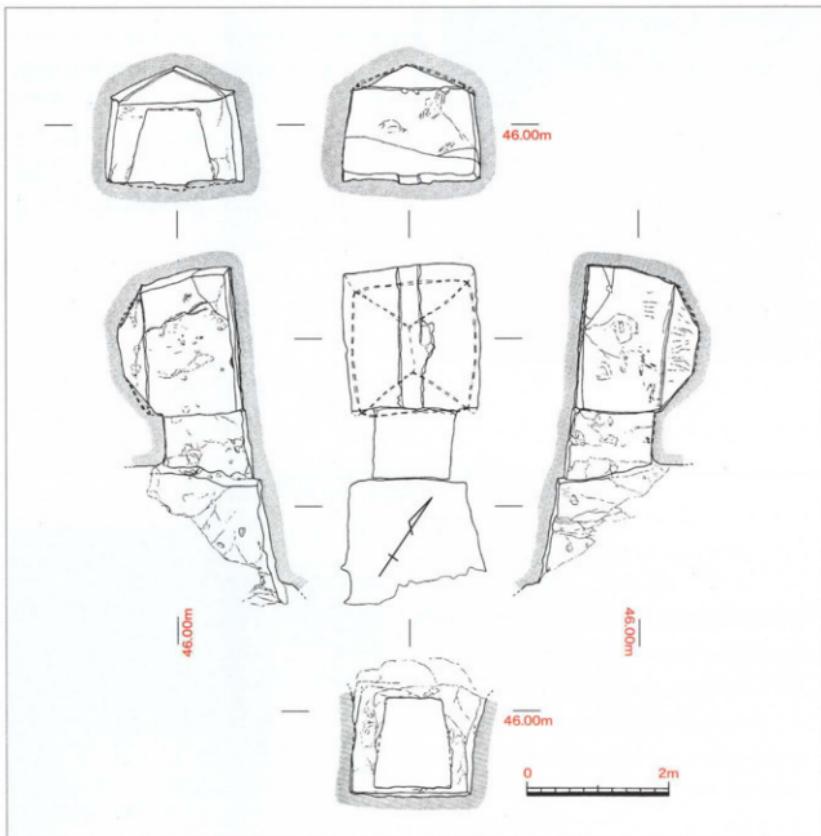
造りかけの横穴墓 (B群3号穴)

第17支群では3穴の造りかけ横穴墓が確認されています。（A群4号穴・B群3号穴・B群6号穴）B群3号穴・B群6号穴については岩盤を少し掘り込んでから床を平らにならす段階でそれ以上造るのを止めてしまっているようです。A群4号穴についてはアーチ型にかなり奥まで掘っていますがこれも途中で止めてしまっています。なぜ、最後まで造らなかったのかはよくわかりません。



しそう 尸床を持つ横穴墓 (A群3号穴)

第17支群の中には1穴だけ屍床を持つ横穴墓
があります。屍床は死者を安置するためのベッ
ドと考えられています。また、死者だけではなく
ふくそうひん 副葬品も置かれていたようです。この横穴墓
では、こういった屍床が玄室の左右に岩盤を削
りだして造られていました。ここはすでに盗掘
ふくそうひん を受けている状態でしたので、人骨や副葬品が
出土せず、遺体が埋葬された状況はわかりませ
んでした。



A群3号穴遺構実測図

供え物を置くための場所？(A群7号穴)

A群1号穴・A群2号穴の間の岩盤には浅い掘り込みがありました。この前面には高環・蓋環といった須恵器が出土しています。高環の1つがこの掘り込みより転げ落ちるような状況で出土したため、死者に対する供え物をここに置いていたのでしょう。また、この岩盤の前面は崩れていると思われ、本当はもっと深い横穴で遺体の埋葬と一緒に須恵器が供えられたのかもしれません。



第17支群の出土遺物

金環・鉄鎌

写真の右側にある金色のリングが金環です。これは現代でいうイヤリングで、横穴墓ではそんなに珍しいものではありません。金環は純金でできているように見えますが、実は銅のリングに金メッキ(正確には金を塗っています)を施して作られています。(A群1号穴出土)

鉄鎌は鉄でできた矢尻です。長い間土に埋まっていたために錆びてしまっています。



須恵器

須恵器は古墳時代より作られ始めた、窯で焼かれる硬質の土器です。

写真にある平瓶・高环・蓋环は上に書いたA群7号穴より出土したものです。

この他にB群1号穴より壺3個体分の破片、A群3号穴より壺の口縁部が出土しました。



古墳時代後期の出雲



大念寺古墳

全長約100mの県内最大級の前方後円墳。巨大な石室を持ち内部には全国最大級の石棺が納められている。



上塩治築山古墳

径約40mの円墳と推定される。切石を組み合わせた巨大な石室を持つ。金冠など優れた副葬品を多く出土した。



地蔵山古墳

一辺約15mの古墳と推定される。各壁に一枚石を多く使用した整美な石室を持つ。

「6～7世紀の出雲市」

6世紀の中頃、現在の出雲市に突如として巨大な古墳が築かれました。それが全長約100mの前方後円墳である大念寺古墳です。それまで目立った古墳の築かれなかった出雲平野に何故このようなものが築かれることとなったかは定かではありませんが、この古墳に埋葬された人物は、広い地域に影響を持った首長であったと考えられます。

その後も7世紀頃まで、上塩治築山古墳(円墳約40m)・地蔵山古墳(方墳? 約15m)など、首長の墓としてふさわしい立派な石室・副葬品を持った古墳が継続して築造されており、その力が一代限りのものではなかったことがうかがえます。

7世紀にはいると、墳丘を持った古墳はほとんど築造されなくなり、変わって横穴墓が盛行するようになりました。上塩治横穴墓群もこの時期を中心として造営されたものです。横穴墓は、それまでの墳丘を持った古墳に比べると数も圧倒的に多く、構造的にも簡素なですが、中には立派な副葬品が出土するものがあります。横穴墓に埋葬された人々がどのような人達であったのか、そして大念寺古墳・築山古墳・地蔵山古墳の被葬者達とどのような関係にあったのか、今後の研究の課題です。

「東西出雲の隔絶」

古墳時代には、出雲地方内部でも文化的・政治的な統一性は薄いものでした。西部出雲(出雲市中心)は割石もしくは切石の巨大石室が盛んに造られる文化圏で、東部出雲(松江市中心)は大型のいえがたっかん形石棺を石室にしたような、石棺式石室が盛んに造られる文化圏でした。また、西部出雲で大念寺古墳などの大規模古墳が造られたように、東部出雲でも山代二子塚古墳(前方後方墳92m)・山代方墳(方墳約40m)などの大規模古墳が同様な時期に造られています。このことは、2つの文化圏に2つの広域地域権力が存在していたであろうことを示しています。ただし、地蔵山古墳などに東部出雲の石棺式石室の影響が見られ、当時の複雑な政治情勢をかいま見ることができます。

「その後の出雲地方」

8世紀に入る頃までには、出雲地方でも古墳は全く見られなくなり、古墳時代の終焉を迎えます。時代は奈良時代(西暦710年～)へと移り変わり、出雲地方は出雲国として統一的に治められるようになります。

古墳時代に見られた東西出雲の隔絶は、東部出雲の勢力が西部出雲の勢力を取り込む形で決着がついたようです。国の政治の中心である国庁（現在の県庁にあたるもの）は現在の松江市に置かれたこととなりました。その下で国内各地に郡家（現在の市町村役場にあたるもの）が置かれ、現在の出雲市周辺地域も、神門郡など出雲国内の一行政区域として治められたようです。



山代ニ子塚古墳

全長約92m、大念寺と並ぶ規模を持つ
前方後方墳。主体部は不明。



出雲國庁

大規模な建物跡や多くの木簡などが発見
された出雲國庁跡。現在の県庁にあたる。

西暦	出雲の古墳編年		当時の出来事
	西部（出雲地域）	東部（松江地域）	
400	北光寺	石屋 井ノ奥4 大庭鶏塚 竹屋岩船	478 倭王武、宋へ使者を送る
500	大念寺 築山	山代ニ子塚 山代方塚	538 仏教伝来
600	地蔵山 横穴墓	永久宅後 横穴墓	593 聖徳太子摂政となる 645 大化の改新

東西出雲の主要古墳編年とその時代



編集・発行 出雲市教育委員会

発 行 1997年3月